館林キリスト教会
デボーションノート（2008 年）

７月　１日　　今日の通読箇所　ヤコブの手紙　１章１９～２７
「みことばを行う人に」
人の怒りは、神様が望みまた要求しておられる義を実現しません。怒り腹を立てるのはおそくしなさい。心に植えられて根を張った御言は、あなたがたの魂を救う力を持っています。御言を聞くだけでそれに従わない人は鏡に映った自分の生まれつきの顔を見てそこを立ち去るのですが、たちまち、自分がどういうものであったか忘れてしまいます。不注意に聞くだけで、あとですぐに忘れてしまうのでなく、積極的にそれに従って行う人は、その行い、すなわち従順の生活によって祝福されるのです。御言を行う人になりなさい。「父なる神のみまえに清く汚れのない信心とは、困っている孤児や、やもめを見舞い、自らは世の汚れに染まずに、身を清く保つことにほかならない」27 節。

７月　２日　　今日の通読箇所　ヤコブの手紙　２章１～８
「自分を愛するように」
イエス様は有名な「親切なサマリヤ人」のお話をしてくださいました。ユダヤ人とサマリヤ人の間には歴史的にも宗教的にも根深い対立と偏見がありました。「親切なサマリヤ人」はそういうユダヤ人の旅人を助け介抱しました。やがてイエス様は選民ユダヤ人だけでなく、全ての人のために十字架で死んでくださいました。イエス様は、分け隔てのない愛を示してくださいました。主が私たちを分け隔てなくお取り扱いくださっているのですから、私たちはなおさらそのように歩むべきで、ここにありますように、経済的に豊かだという理由で人を優遇し、貧しいという理由で人を冷遇することは全くみ心ではありません。どちらも、救われなければならない、主に愛されている人々なのです。8 節の教えは、律法の最高の教えです。

７月　３日　　今日の通読箇所　ヤコブの手紙　２章９～１３
「さばきに勝つあわれみ」
ヤコブは、「もし分け隔てをするならば」（９節）とのべて、分け隔てに対する罪を指摘しています。なぜなら神様の律法についての原則は、律法のどの部分を犯しても、その人は律法の違反者となるからです。他の面でどんなによかったとしても、たった一つ、兄弟を分け隔てするならば、神様の律法を破ったことになり、罪を犯した人となるのです。人は誰でも、自分の蒔いたものを刈りとることになります。そして、終わりの日に、神様はあらゆる人々を律法によ

って厳重な刑罰に定めることになるのです。しかし人々が、自分は神様に罪を赦されたゆえに、他の人を赦し、主のあわれみを感謝し、他人に対してあわれみの心を示していくならば、神様はご自身の栄光の中に入れてくださるのです。こうして、あわれみはさばきに勝つのです。

７月　４日　　今日の通読箇所　ヤコブの手紙　２章１４～２６
「行いと信仰」
この段落は、この手紙の中で最も重要な点としてあげられる箇所です。教会の歴史においても様々な波紋を呼び起こしてきたところです。人は信仰によってのみ救われることを強調したルターは、ヤコブの手紙が、信仰に対して行いを強調しているので、この手紙を「藁の書簡」と呼んで非難したのは有名です。この段落を一言で言い表すならば、行いの伴わない信仰は意味がない、ということです。もちろんパウロの言った信仰による救いを非難したわけではありません。ただ「信仰、信仰」と言っている事に対する反動として、この頃には行いを軽視する人たちがいたのです。イエス様を信じたといいながら、その生活や行いに信仰が生きていない人たちがいたのです。ヤコブはそういう状態を大変心配し、行いを強調して書いているのです。

７月　５日　　今日の通読箇所　ヤコブの手紙　３章１～１２
「甘い水、苦い水」
神様は謙遜に罪を悔い改める者をゆるしてくださる愛なる方です。一方、聖書には教師は他の人たちよりも厳しい裁きを受けることが明記されています。私たちは皆多くのあやまちを犯す者ですが殊に言葉において過ちのない人はなく「舌を制しうる人は、ひとりもいない」（8 節）とあるほどです。さらに聖書には、舌は火であり、不義の世界、制しにくい悪であり、死の毒に満ちている、とあります。このような状態からの救いは神様による以外にはありません。「わたしはあなたにむかって罪を犯すことのないように、心のうちにみ言葉をたくわえました。」（詩篇 119 章 11）

７月　６日　　今日の通読箇所　ヤコブの手紙　３章１３～１８
「真の知恵」
真の知恵、賢さは、柔和な行いを伴う生き方に表れます。柔和こそ知恵ある人の生き方で、よい生活によって柔和を表すよう勧めています。イエス様は柔和な方で「すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう。わたしは柔和で心のへりくだった者であるから、わたしのくびきを負うて、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたの魂

に休みが与えられるであろう。」と言われました。ねたみや党派心とは無関係な清い心、神様との平和に与った者が人との間に築く平和、それを実践する道は人に対する寛容な心、み心にかなった生き方という実は、平和をつくりだす人が平和のうちに蒔いて収穫されるのです。

７月　７日　　今日の通読箇所　ヤコブの手紙　４章１～１０
「キリスト者の敵」
この箇所は、現代の新聞記事を見るような気がします。「戦い」「争い」「欲情」「人殺し」「快楽」等のことばが次から次に出てきます。そこで著者ヤコブは、ここにおいてキリスト者が心に留めておかなければならない三つの敵がいることを示し、その解決の道を教えたのです。第一の敵は「世」(４節)です。「世」とは、神様を認めない、受け入れない、それに従おうとしない人間世界のことです。第二に敵は「悪魔」(７節)です。神様と神様を信じる私たちに反対して働いている、霊的な存在です。悪魔は今も私たちに働きかけて、私たちを陥れようとしている敵です。第三の敵は、「罪」(８節)です。欲望とか戦いとか争いは罪からくるのです。この３つの敵に対する対処は次回に学びましょう。

７月　８日　　今日の通読箇所　ヤコブの手紙　４章７～１０
「敵に勝つ道」
著者ヤコブは、キリスト者には様々な敵がいることを示すと共に、その解決の方法をはっきりと命じています。第一の命令は「神に従いなさい」(７節)です。神に従わないことが罪ですから、罪に勝つ方法は神に従うことであることは当然です。第二の命令は「神に近づきなさい」(８節)です。神様に近づくとは、礼拝に出ること、聖書を読むこと、祈ることなどもそうですし、また自分の罪を悔い改めて、キリストの十字架により頼むことも神様に近づくこととです。第三の命令は「主のみまえにへりくだれ」(１０節)です。人の前にではありません。あの人は謙遜な人だ、腰の低い人だと言われることはそう難しくはないでしょう。しかし聖書は「主のまえに」と言っています。これらの命令に従うことはキリスト者が敵に勝つ道なのです。

７月　９日　　今日の通読箇所　ヤコブの手紙　４章１１～１７
「悪口について」
この世の一つの傾向は、人が寄り集まれば誰かの悪口を言う、ということかもしれません。これは人間の罪の傾向で、クリスチャンでも陥らないとは言えない危険です。悪口は律法違反すなわち罪で、律法をお定めになり、審判者である神様をないがしろにすることなのです。13 節の商人は、主権者である神様を

忘れた人の姿です。人の命は霧のように儚く、神様はどのようにでもなされる主権者です。人々は、神を信じるのは弱い者で、自力で生きることこそ強く確固とした生き方だ、と言います。しかしこれは高慢な考えで、確実な神様を信じることこそ確かな生き方なのです。ある人は 17 節について、後の日に神様に問われるのは「どんな良いことをしたか」でなく「どんな良いことをしなかったか」だと解説しています。（マタイ 25 章 45）

７月１０日　　今日の通読箇所　ヤコブの手紙　５章１～１１
「のちの日の喜び」
アブラハムを始めとする族長たちは、羊などの多くの家畜と豊かな財を所有していました。イスラエル王ソロモンは「栄華を極め」、国は平和で繁栄しました。ソロモンが王になったとき、神様は、願い事を求めるように、と言われました。ソロモンは王として民を正しく指導するために知恵を求めました。これに対して神様は、知恵に加えて、彼が求めなかった富と誉れをも与えてくださったのです。富は神様の祝福です、心が神様に向いているなら。しかし、蝕まれ錆びて朽ちる富を拠り所とするのは大きな誤算です。後半の農夫の忍耐と収穫の喜びは、終りの日に生きる者たちのよいお手本です。ヨブは信仰と忍耐をもって待ち望み、最後には何倍もの祝福を受けました。ヨブの最後を見れば、主がいかに慈愛に富んだ方か、わかるのです。

７月１１日　　今日の通読箇所　ヤコブの手紙　５章１２～２０
「お祈りの条件」
この箇所には、三つの良いお祈りの条件が記されています。その第一は、主の御名による祈り（１４節）です。それは、父なる神様と私たちの仲保者であるイエス様が、私たちの祈りを父なる神様にとりなしていてくださるからです。第二は、信仰による祈り（１５節）です。神様は聞いてくださるかどうかわからないというような不信仰な祈りではなく、神様は全能のお方なのだから、私たちの祈りを聞いて答えてくださるということを信じて祈るからです。第三は、義人の祈り（１６節）です。義人とは、神様によって罪を赦されて義とされた人のことです。著者ヤコブはエリヤを例にあげて、彼は私たちと同じ人間でしたが、彼が祈ると雨が降らず、再び祈ると雨が降るほど、彼の祈りには大きな力があったと言っています。

７月１２日　　今日の通読箇所　箴言　１章１～１９
「敬虔と知恵」
ソロモンは中年のころ、少しく信仰から脱線の気味があった。しかし晩年には、

また初期の信仰が回復したものと見える。「箴言」「伝道の書」などは、晩年のソロモンが宮廷に同信、同学の士を集めて「教室」あるいは「研究所」を開き、聖書に基づく人生哲学を研究した業績だと思う。そのためソロモンは「コーヘレス（伝道者）」とあだ名されたそうだ。「箴言」とは、鋭く急所を刺して病気を癒す「針」のような、「格言」「人生の知恵」という意味だ。[7 節]の「主を恐れることは知識の始めである」とは、箴言の巻頭におかれるにふさわしい言葉だ。人生に役立つ真の知識、知恵は、頭でなく、信仰によって神から頂く心と人格の問題なのだから。

７月１３日　　今日の通読箇所　箴言　２章１～２２
「知識の楽しみ」
「知恵が心に入り、知識が魂の楽しみとなる」[10 節]とは救われた者の経験だ。「ああ私は何とみじめな人間なのだろう。私の欲している善はしないで、欲していない悪はこれを行っている」とパウロが告白したように、生れつきのままの人間は善悪のわきまえを持ちつつ、不思議に罪に引かれ罪を犯しやすい。しかし、キリストは信じて救われた者に「新しい心」を与えて「善には喜び親しみ、悪は嫌悪して避ける」勝利の生涯を与えて下さるのだ。「誰でもキリストにあるならば、その人は新しく造られたのである」

７月１４日　　今日の通読箇所　箴言　３章１～２０
「ネクタイ、ペンダント」
「いつくしみとまこと」[3 節]つまり「優しさと真実」を、男子はネクタイのように首に巻き、女性はペンダントのように胸に下げておこう。これこそ最高のおしゃれだ。その結果として、彼は「神と人の前に恵みと誉れを得る」つまり、「神と人から優しくされ、また尊敬もされる」だろう。本当のおしゃれは、古びたり、落ちたり、剥げたりする衣服、装身具ではなく、彼の人格にこそあるのだ。

７月１５日　　今日の通読箇所　箴言　４章１～１９
「明るい一日」
昔の人にとって夜は暗くて恐ろしく、ただもう朝が待たれた。朝日が昇ると、明るい太陽のもと、花や小鳥にかこまれてみんなで働く、楽しい一日が来るのだ。[18 節]には、正しい者の人生は「夜明けの光のようだ」と記してある。しかし悪い者は反対で、その暗黒の生活の中に多くの危険が隠れ、やがてつまずき倒れるのだ。愚かな人間の盗みも、地位のある人の賄賂も、つまりは罪を恐れない、快楽中心、欲望拡大の心掛けの結果にすぎない。

７月１６日　　今日の通読箇所　箴言　５章１～２３
「蜂蜜と苦菜」
遊女の誘惑は、最初は蜂蜜のように甘く楽しい。しかし最後は苦菜のように人を悩ませ、剣のように彼を滅ぼす。その気の毒な実例は我々の周囲に、新聞やテレビなどにもいくらでもある。「子供らよ。私の言うことを聞け。私の言葉から離れ去ってはならない」[7 節]という神の呼びかけに、いつもお従いして行くのが安全だ。

７月１７日　　今日の通読箇所　箴言　６章１～１９
「なまけもの」
昔から「なまけもの」を形容した文章も多いが、この[6～11 節]は出色の名文だと思う。なまけ者が貧乏するのは「蟻」に対しても恥ずかしい。泥棒や強盗に金を取られるのもくやしいが、なまけ者は、毎日自分の内に泥棒や強盗を飼っているようなもので、取られる前から金は溜まらない。これはなにも金銭だけの問題ではない。忘れるより前に、はじめから勉強しない学生も、人を集める前に、散らす専門の牧師もいるかもしれない。

７月１８日　　今日の通読箇所　箴言　７章１～２３
「出会いと堕落」
一人の青年は「飛んで火に入る夏の虫」のように、わざわざ誘惑の多い危険な町を、しかも暗い夜更けに歩いている。一人の女は「騒がしく慎みなく」ほとんど家を外にしてふらふら歩き回っている。二人の出会いも堕落も実にスムースで、相手に誘惑される前にすでに自分で自分を誘惑していたようなものだ。「人が誘惑に陥るのは、それぞれ欲に引かれて誘われるからだ」とヤコブが言うとおりだ。

７月１９日　　今日の通読箇所　箴言　８章１～３１
「真の知恵キリスト」
この章は「知恵の擬人化」で、むしろキリストの旧約的、箴言的啓示という感じだ。主が万物を創造された時、そのみ業の原理として最初から存在したとは、なんという壮大な知恵の啓示だろう。家庭、事業、教会、どうぞ一切の業の始めにキリストが崇められ彼の光が原理として貫かれるように。そこに我々と、その業は一切の過ちから守られ祝福から祝福に進むことができるのだ。

７月２０日　　今日の通読箇所　箴言　９章１～１８
「知恵の招き」

キリストは「王子の婚宴」の話で、多くの祝福を準備して人々を招く神のみ心をお語りになった。ここにも同じ思想が示されている。これに対して昔も今も人々の反応は様々だ。祝福の福音を聞いてそれを受ける人も、頑固に拒み逆らい、かえって相手を傷つける者もいる。拒まれた神の愛こそ最も深刻に傷つけられた痛みなのだ。彼らが放置されてしまうのもまた止むをえない。

７月２１日　　今日の通読箇所　箴言　１０章１～１６
「率直な忠告」
ここから「ソロモンの箴言」で短く、独立した対句の箴言集になる。「目くばせする者は人を痛め、むだ口をたたく愚か者は人を痛め、むだ口をたたく愚か者は踏みつけられる」[10 節]は、本人に分からないように「いやねえ」というような視線を交わす目配せだ。率直でない。陰口はもっと率直でない。ここでは必要な時に「率直に忠告」することを勧めている。相手にはショックでも、神の取扱いで「心に知恵のある者は命令を受け入れる」[8 節]のような結果になれば最高だ。いつも誰にもではないが、時には必要な注意だ。

７月２２日　　今日の通読箇所　箴言　１０章１７～３２
「価値ある日々」
「主を恐れることは日をふやし、悪者の年は縮められる」[27 節]とある。昔南米辺りの田舎では、土地を売買するのに、間口だけ決めて、奥行きは問わなかったそうだが、信仰ある者の一日は、その長さこそ変わらないが価値と満足において奥深さが違う。私は、過日しばしの休暇旅行の機会が与えられた。宴会や羽目外しの旅ではなく、十分な休養と見学が許され、実に有益な旅であったことは感謝だ。

７月２３日　　今日の通読箇所　箴言　１１章１～１８
「指導者」
「指導者がないことによって民は倒れ、多くの助言者によって、救いを得る」[14 節]これは教会生活で我々がよく経験していることだ。教会は安心して相談できる人、貴重な助言をしてくれる人に満ちていて、お互いにどんなに心強いかわからない。だから、みんなが良い指導者、良い助言者であるように祈り、反省し、研究しなければならない。教会が、人に迷惑をかけてもぜんぜん感じない非常識な人や、井戸端会議のおかみさん連中のような、おしゃべりに満たされたら、それこそ大変だ。

７月２４日　　今日の通読箇所　箴言　１１章１９～３１
「豚の鼻輪」
ソロモン王は、その豊富な女性経験からか、女性に対する辛らつな箴言を多く書き残している。「美しいが、たしなみのない女は金の輪が豚の鼻にあるようだ」[22 節]この言葉の意味は、「美しさを鼻にかけても、その下から人格、精神、教養の程度は見え見えで、それはまるで豚のように、雑駁(ざっぱく)、下品、不潔だ」ということだろう。テレビの美人コンクールなどが終わった時に、さしもの美人が、しゃべり出すとたんに幻滅、というようなことはよくある。どうか我らのクリスチャン女性は、ゆめゆめそうでないように。

７月２５日　　今日の通読箇所　箴言　１２章１～２８
「お節介焼き」
「自分の畑を耕すものは食糧に飽き足り、むなしいものを追い求める者は思慮に欠ける」[11 節]。確かに「自分の畑を耕す者」と「無益なことに従う者」がいる。地道に稼がず、おだてられて町の世話役などにかけまわり、自分は貧乏になることもある。戦争中の牧師にも、政治や情報に明るいと称する誇大妄想的人種がいて、対策が必要だと鞄を抱えて会議に飛び回り、聖書の勉強も伝道も手につかなかった。ただしこれは昔話である。

７月２６日　　今日の通読箇所　箴言　１３章１～２５
「良友、悪友」
「知恵ある者とともに歩む者は知恵を得る。愚かな者の友となる者は害を受ける」[20 節]]交際、友人の感化、影響は大きい。我々は良い友を選ぶべきだ。中国には「我を生みしは父母、我を知るものは包仲」と言った管淑（かんしゅく）の言葉があり、ロード・ブルックスはサー・フィリップス・シドニーの友人であったことを誇りとし、その墓に「シドニーの友ブルックスここに眠る」と刻ませたそうだ。その交友の深さが偲ばれる。

７月２７日　　今日の通読箇所　箴言　１４章１～２０
「信念の人」
「人の目にはまっすぐに見える道がある。その道の終わりは死の道である」[12 節]人は信念という言葉が好きで、それが客観的に正しいかどうかを問わないことが案外多く、まあ突っ張りの一種なのかも知れない。地獄には結構、自信に満ちた突っ張り屋、小会社の社長などによく見る、威張り好き、自慢好き、講釈好きがいる可能性がある。しかし、地獄ではもう威張れない。「幼子のようでなければ天国には入れない」のだから、お互い今のうちに主の光に従おう。

７月２８日　　今日の通読箇所　箴言　１４章２１～３５
「ストレス」
現代はストレスの時代で、「ストレスなしに月給を貰おうなんてのは図々しい」といわれるそうだ。そこでストレス解消法の研究も盛んだ。ここに「穏やかな心は、からだの命。激しい思いは骨をむしばむ」[30 節]とあるのは至言だ。とにかく我々は興奮しやすい。後で考えるとつまらないことでもつい興奮する。しかし、祈りとみことばは我々の心を静めてくれる。クリスチャンは神によってストレスから守られることを感謝したい。

７月２９日　　今日の通読箇所　箴言　１５章１～１４
「独断、先鋭」
「知恵ある者の舌は知識をよく用い」[2 節]「激しいことばは怒りを引き起こす」[1 節]　殊複雑、微妙、重大な問題に対する、勢いに乗った独断、軽率、先鋭、激越、挑発的な発言は、ある人々の怒りを引き起こすのは当然だ。不必要に敵を作り、自分だけでなく教会にも迷惑をかけないように、勉強、公平な判断、慎重な発言が大切だと思う。

７月３０日　　今日の通読箇所　箴言　１５章１５～３３
「グルメブーム」
「野菜を食べて互いに愛するのは、肥えた牛を食べて互いに憎むのにまさる」グルメブームでいくら高くても、遠くてもおいしいものを食べにゆく時代だ。しかし、瀬戸内海の魚を食べるツアーで、鮎が出てきても平気な写真を見て驚いた。中国では「富貴三代にして初めて飲食を知る」というが、急に食通にはなれない。このお言葉などが案外、「本当の食通」なのかも知れない。

７月３１日　　今日の通読箇所　箴言　１６章１～１７
「生活設計」
ひもの先に玉をつけて振り回すと玉は輪を描いて回る。その玉の瞬間瞬間の動きを言えば、そのまま遠くへ飛んでいきたい玉の遠心力と、それをつなぎ止めるひもの緊張が、飛び方を決めているのだ。人間の場合も、自分の計画と神様の摂理の調和が実際の生活となる。「人は自分の道を考え計る。しかしその歩みを導くものは主である[9 節]」我々はいつも祈りながら生活設計をし、また神の摂理をも喜ぶ信仰が必要だ。